



# 第2回有識者検討会における議論について

令和5年7月

農林水産省

大臣官房デジタル戦略グループ

## 第2回検討会における委員の主な御発言内容

委員名	発言内容
荻野委員	<ul style="list-style-type: none"><li>・kikitoriの取組は、支援して一緒に取り組んでいるので中身はよく存じ上げている。</li><li>・流通分野で、JAは、全国で一斉に連携できるわけではなく各JAの判断になり、苦勞を掛けている。それでもなるべく同じプラットフォームを使った方がよく、<b>いずれは出荷と消費者側・小売の情報をマッチングさせ、需要や出荷を前もって知るなど、効率性の高い取組を社会実装していければ、日本の食や農業のより一層の効率化につながる</b>ので、ぜひ頑張ってもらいたい。我々も応援していく。</li></ul>
中谷委員	<ul style="list-style-type: none"><li>・北海道でスマート農業が進んできたことを実感した一方、農業者から、従来耕作適地とみなされてきた平場でも、<b>情報通信網がないというだけで条件不利地域にみなされ、同じような条件でも携帯が繋がらないところは耕作をやめる可能性がある</b>と聞いた。<b>情報通信網の整備は耕作放棄の防止対策として喫緊に求められているのではないかと感じた。</b></li><li>・情報通信に関する実証実験で生じた追加的な負担が格差を生み出す部分もある。</li><li>・システムの連携については、別の企業の間でもAPIでつながることを目指すべきで、<b>APIの規格統一も一つの方向性ではないか。</b>また、<b>スマート農業のサービス事業者について、北海道でも関心はあるが、費用負担の面も含め、利用しやすくする仕組みづくりを進めるべき。</b></li></ul>
岡林委員	<ul style="list-style-type: none"><li>・流通に係るJAのシステムは個々に異なり統合が難しく、高知ではJAの合併により荷受けデータはまとまってきたものの、生産関係も含めると一本化にはまだ時間がかかる。<b>nimaruのシステムのような形で進めると、農協系統は流通のシェアも大きく、便利になるので頑張ってもらいたい。</b></li><li>・産地と流通側のプラットフォームが繋がっていくことが大事かと思う。</li><li>・欧米は量販店の寡占が進んでいるので、GAPにしても小売商組合が実施していて当たり前になっているが、<b>日本は、GAPや生産履歴がなくても、市場で全く問題なく流通販売できる仕組みになっている。</b>ベトナムのような取組もあるので、消費者と連携して取組を進めたい。</li></ul>

## 第2回検討会における委員の主な御発言内容

委員名	発言内容
休坂委員	<ul style="list-style-type: none"><li>・データ活用の重要性の大前提として、<b>顧客との接点をデジタル化することの重要性を感じた。</b></li><li>・<b>IDやデータ構造がバラバラな現状も踏まえ、その標準化もデータ活用の前提である。</b></li><li>・良いシステムを作るだけではだめで、コスト削減や付加価値向上等の経済的効用が必要である。</li><li>・改訂DX構想の提言として、資材、エネルギー価格等の高騰に対する農業DXとしてのアプローチについて深掘りをしてはどうか。また、飲食店では非接触のサービスが増えており、スマホの普及を踏まえ、改めてスマホを見直し、農業DXに貢献するツールとして検討してはどうか。</li></ul>
加藤委員	<ul style="list-style-type: none"><li>・高知県北川村でローカル5Gの実証を行っており、現在、LTE等の活用で自動走行に取り組んでいる。遠隔操作は実施できているが費用的に継続利用は難しい。</li><li>・大規模な統一規格の使用は自動車産業や医療業界と同様に難しく、<b>まずはデジタルができる事業体を増やす必要がある。地域毎にデータ基盤同士をゆるくつなげる方式が望ましい。</b></li><li>・野菜や穀物栽培の大規模化、効率化にIT化やロボット化は必要であり、<b>多様な農業を維持できる豊かさも含めてデジタルの活用は役に立つ。</b></li></ul>
宮島委員	<ul style="list-style-type: none"><li>・通信環境は場所によって異なり、同じような条件にすることは重要ではあるが今なおできていない部分。</li><li>・<b>スマート農業は必要と思われれば進んでいくものだと思うが、一方でその推進を阻んでいるものが何であるかを探し、それを取り除いていくことが何より必要。</b></li><li>・流通のDXがもたらすダイナミックな変化に期待しており、1、2年前からかなり進んだ取組が一部にみられるが、全体のスピード感には懸念がある。</li></ul>

## 第2回検討会における委員の主な御発言内容

委員名	発言内容
三輪座長	<ul style="list-style-type: none"><li>・スマート農業、流通DXでは優良事例が出てきている状況であるが、これを社会全体に広げていく必要。</li><li>・今は<b>効率化・省力化を実現するデジタルイゼーションの段階</b>にあり、これを農業や食品産業<b>全体を変革するDXにつなげるには、各事業者の事業としての取組は当然であるが、国としてのリーダーシップ、ディレクションが必要</b>になってくると改めて感じた。</li><li>・スマート農業でも流通DXの普及でも、<b>国がどこまで関与する中でDXを進めるかの議論が不可欠なタイミング</b>。国・自治体の関与により、<b>つなぐことをサポートすることで、部分最適ではなく全体最適を目指すことをDX構想の中で方向性として示すべきではないか</b>。</li><li>・スマート農業の導入については、自らスマート農業に取り組むパターンと、サービス事業体にお願いして、間接的にスマート農業を導入するというパターンがあり、両者のバランスについても示していけると良いのではないかと。</li></ul>